

## 平成11年度修士論文要旨

その他のタイトル	Zusammenfassung der Magisterarbeiten 1999
著者	長縄 寛, 長谷川 隆三
雑誌名	独逸文学
巻	45
ページ	143-145
発行年	2001-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00018138">http://hdl.handle.net/10112/00018138</a>

# 古高，中高ドイツ語における 不定関係代名詞の用例の比較

(OtfridとIweinを中心にして)

長 縄 寛

ドイツ語の不定関係代名詞wer, wasは、古高ドイツ語のテキストに数多く見られるsô hwer sô, sô hwaz sôという一定の表現形式から発生したとされる。中高ドイツ語ではこれがswer, swazへと一語化し、語頭のsが脱落することによってwer, wasは現代では疑問代名詞と同一の語形となっている。関係代名詞wer, wasは関係文の導入語と先行詞の機能も兼ね備える。そして主文中には関係代名詞を受け直す指示代名詞der, dasが置かれることが多い。新高ドイツ語では、関係文の後に主文が続く場合、主文と関係文がともに同じ格を要求すれば（前置詞を伴う時、属格の時以外）、指示代名詞を省略してもよいとされ、反対に主文のあとに関係文が続けば指示代名詞は現れないというのが一般的に言われていることである。（ただしこれには例外も多く、関係文前置の場合、主文と関係文の要求格が違う時でも、主格の指示代名詞は省略されることがある。また関係文後置の場合には主文中の指示代名詞の格を明示するため省略しないケースもある。）しかし古高，中高ドイツ語のテキストを見る限り、代名詞の省略は新高ドイツ語ほど頻繁に行われていないようである。論文ではその一例として、古高ドイツ語における代表的な文献である「オトフリートの福音書」(Otfrids Evangelienbuch)と、中高ドイツ語の英雄叙事詩「イーヴァイン」(Iwein)に見られる関係文の用例を比較した。

関係文前置の場合、新高ドイツ語で代名詞の省略が可能なケース（主文と関係文が同じ格を要求するケース、及び中性の主格、対格の組み合わせであるケース）でも、Otfridで代名詞が省略されていたのは24例中の3例(12,5%)のみ、Iweinでは21例中代名詞が省略されていたものはなかった。しかし関係文後置の場合には、通常代名詞の省略が起こるこ

ういったケースで、Otfridではまだ13例中の4例(31%)でしか省略されていないにもかかわらず、Iweinでは20例中の16例(80%)で省略が起こっていた。

このように代名詞の省略は、関係文前置のケースでは、古高、中高ドイツ語期には一般的でなかったが、関係文後置のケースでは、特に中高ドイツ語期に浸透してきたものと考えられる。しかしこういった現象が広く古高、中高ドイツ語一般に見られることなのか、作家の個人的な傾向であるのかといった疑問に答えるためには、さらに多くのテキストを考慮に入れる必要があることは言うまでもない。

## シュテファン・ツヴァイクとウィーン

長谷川 隆三

シュテファン・ツヴァイク（1881-1942）はウィーンに生まれ、ブラジル亡命中に亡くなった。彼は時代との遭遇によって、1918年ハプスブルク崩壊に立ちあつた。この時期は、国際的に微妙な時期であつた。同年11月9日に、隣国のドイツでベルリン革命が起きた。同年11月12日、オーストリア共和国が成立した。このオーストリア共和国は協商国（英・仏・露）によって押しつけられた国家であつた。同じ民族である故に、ハプスブルク帝国解体後、ドイツ共和国との併合を、オーストリア共和国は望んだが、国際的な力の均衡政策によって、ドイツ＝オーストリア併合は中断された。

このような背景を背負つたウィーンの文化は、伝統と革新に揺れる時期、世紀転換期（1890-1920）に、ウィーン都市文化の中核をなした、ホーフマンスタール、シュニツラー、アルテンベルクそしてヘルマン・バルといった人々によって担われた。彼ら、作家たちのなかで、ユダヤ系の人々は極めて多く、同化ユダヤ人であつた。彼らは高等教育を受け、ギリシャ・ローマの古典を含むヨーロッパ文化を自己の血肉とした階層であつた。

ウィーン文化の諸領域で登場してきたユダヤ系の人々は、否応なく自らの執事を意識せざるを得ない、次第に高まりつつあつた、反ユダヤ主義との内面的、社会的対決を迫られることになつた。

ユダヤ教伝統のメシア救済の方向、モーゼス・メンデルスゾーンに由来する理性の方向と、政治的均衡によるシオニズムの三つの方向があつた。数世代にわたる同化ユダヤ人のヨーロッパ教養の血肉化の過程は、セファルディであれ、アシケナージであれ、ヨーロッパ教養の土壌に根ざすものであつた。